

平成 21 年 4 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007年度～2008年度
 課題番号：19730540
 研究課題名（和文） 学校段階に応じた歴史教育実践のあり方に関する研究
 研究課題名（英文） The research that the history lessons should practice according to the grade of educational institutions
 研究代表者
 竹中 伸夫（TAKENAKA NOBUO）
 就実大学・人文科学部・講師
 研究者番号：60432704

研究成果の概要：

日本の学習指導要領にあたるナショナル・カリキュラムに基づき、構造的・系統的に教育課程が組織されているイギリスの歴史教育を手がかりに、学校段階に応じていかなる差異を設け、歴史教育実践をおこなっていくべきなのか、をカリキュラム、教科書、授業実践の三つのレベルから、複合的・具体的に解明することによって、学校段階に応じて歴史教育をいかなる方略を採用して段階的に行っていくことが望ましいのかに関する一つの方略を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1200000	0	1200000
2008年度	800000	240000	1040000
年度			
年度			
年度			
総計	2000000	240000	2240000

研究分野：歴史教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：歴史教育・発達段階・シーケンス

1. 研究開始当初の背景

（1）教育間の連携の必要性

教育を学校段階に応じて、どのように差異化し、またはどのように一貫して、系統的に行っていくべきなのか。現在、幼・小連係や小・中連携、中高一貫教育の模索など、異なる学校段階ごとの教育実践上の連携の試みが盛んになされている。

しかし、わが国では、学習指導要領が、学校段階ごとに独立して策定されており、その

ため、教育目標・内容・方法に一貫性や連続性、系統性を持たせた教育カリキュラムを策定することが困難な状況にあるといえる。こうした教育行政上の特質もあいまって、学校段階ごとの連携といっても、それぞれの役割分担の確認に終始したり、従前の教育を踏まえた事後の教育の冒頭での接続の在り方を模索したりといった、部分的な連携にとどまっているのが現状である。そもそも、学校段階に応じて、教育はどのように行われるべきなのだろうか。このような疑問が解決でき

れば、連携の在り方に一つの指針が示せるのではないだろうか。

こうした疑問により直接的な示唆を与えてくれるのがイギリス（イングランド）の教育である。イギリスでは、わが国の教育行政上の特徴とは異なり、我が国の学習指導要領にあたるナショナル・カリキュラムが、全学校段階を通じて教科ごとに策定されている。そのため、一貫性や連続性・系統性を意識したカリキュラムとなっているといえる。

幼・小連携などといった学校段階を超えた教育実践の連携の必要性が叫ばれる現在、それはどのように実践すべきなのか、その一つの在り方を具体的な事例を手がかりに解明する必要があると考えられた。

（２）わが国の歴史教育の現状

現在、我が国においては主として、小学校6年、中学校歴史的分野、高等学校地理歴史科において歴史教育がおこなわれている。

それぞれの学校段階における歴史教育を比較し、そこからシークエンス（学校段階に応じた順序性）を抽出すると、日本や世界に関する歴史事象の教授を目的として、学習内容を年代順に配列しつつ、学校段階に応じてより詳しく学習をおこなう、つまり同一事象に関して、従前の学校段階では学習しなかったより詳しい内容まで踏み込んで教える、ないしは、内容領域を自国から世界へと同心円的に拡大させるといった配慮がみられるのみである。

つまり内容編成から考えると、現行のカリキュラムは、学習者に対する教育内容の難易度に依拠し、量的拡大を意識した内容編成を行っているということになる。

歴史とは過去の事象を基にした解釈である、という歴史哲学の知見に基づくならば、こうした常識的ともいえる原理に基づくわが国の歴史教育実践は、本来は特定の見方・考え方にしか過ぎないある解釈を自明視し、その解釈にそった過去の事実を学校段階に応じて徐々に詳細になっていく形式で暗記させることを中心とする極めて問題が多い学習とならざるを得ない。そこで、上記のような教育内容の難易度に基づくものとはことなる何らかのカリキュラム構築のための原理の解明が必要となるのではないだろうか、と考えられた。

2．研究の目的

本研究の目的は、現在のイギリス（イングランド）では、ナショナル・カリキュラムに基づき、学校段階に応じて、いかなる差異を設け、歴史教育実践をおこなっているのか、をカリキュラム、教科書、授業実践の三つのレベルから、複合的・具体的に解明し、学校

段階に応じて歴史教育をいかなる方略を採用して段階的に行っていくことが望ましいのか解明することであった。

その理由としては、研究の背景においても記述したように、現在わが国において異なる学校段階間の連携が盛んになってきつつあるが、まだ部分的な連携にとどまっており、連携の在り方に対する明確な指針をイギリスの教育を手がかりに解明する必要があると考えられるからである。また、歴史教育に関して学習指導要領を見ると、学習者に対する教育内容の難易度に依拠し、量的拡大を意識した内容編成を行っているだけで、内容の繰り返しという問題を回避するには不十分な状況となっているため、量的拡大に依拠しない教育内容編成の在り方に関して明確な指針を構築する必要があるということである。

3．研究の方法

本研究は、以下の3つの次元それぞれについて、学校段階に応じて、どのように歴史教育が組織・実践されているかを具体的に明らかにし、それらを複合的に考察することで、わが国における歴史教育実践の段階性についての指針を解明しようとするものであった。

（１）カリキュラムレベルでの分析

分析対象

具体的な分析対象としては、1991年版、1999年版、2007年版のナショナル・カリキュラムと、カリキュラム策定・運用に積極的に関与している機関（QCAやAQA）でのインタビュー結果、評価問題として2007年実施のGCSEがあげられる。

1991年版は、イギリス（イングランド）において、はじめて公的に組織されたカリキュラムである。その後のカリキュラムの簡略化、内容のスリム化という流れを考えれば、イギリスの歴史教育界が当時志向した歴史教育が最も色濃く、かつ忠実に再現されているものとして位置づけられる。そのため、1980年代以降のイギリスの歴史教育界がどのようなカリキュラムを志向したのか、またどのようなカリキュラムとして結実し、90年代を通じてどのように実践されたかを明らかにする対象として選択した。また、2007年版は最新のカリキュラムではあるが、中等段階のみの改訂となっている。そのため、従前の1999年版と2007年版の二つを手がかりに、現在のイギリスの歴史教育がどのように学校段階に応じて組織されているのかを分析する対象として選択した。また、これらのカリキュラムによってどのような学力の育成がめざされているのか、カリキュラムの構造と原理を評価の観点からも見直してみる

ことが必要と考え、2007年実施の評価問題も分析対象に加えた。

以上に加えて、現地に赴き、そのカリキュラムの策定に関与した機関であるQCAやそのカリキュラムにもとづく学習成果やその測定方法に関与するAQAを訪問し、そのカリキュラムの意図や目標構造に内在する原理等についてインタビューによる調査を行った。

分析方法

1991年版を手がかりに、どのような目標構造となっているのかを、到達目標を手がかりに明らかにすると共に、その構造が最新版のカリキュラムにおいてどのように変容し、また変容してないかを明らかにした。その上で、そのような目標構造を具現化するために、どのような教育内容編成となっているかを、学習プログラムを手がかりに明らかにした。最後に、そのような目標の実現を保証するために、どのような評価を行っているかを、評価問題を手がかりに分析した。

また、こうした分析を行う上で、インタビューの結果をもとに、そのカリキュラムを策定した機関では、どのように考えられているか、あるいは考えられてはいても、それが十分に分析対象に反映されていない場合もあるので、理念と実際の間の類似性と相違性を吟味した。

(2) 教科書レベルでの分析

分析対象

イギリスでは、わが国様な検定制度はなく、また、採択率も正確にはわからないので、比較的大手の出版社で、すべての学校段階向けの教科書を出版している出版社を複数選定し、その教科書を比較分析するという方法をとった。選択した出版社は、HeinemannとLongmanの二社である。二社が発行している歴史の教科書のうち、最もナショナル・カリキュラムに忠実と思われるシリーズを学校段階ごとに一つ以上ピックアップして収集した。

分析方法

(1)より、知識の有無ではなく、知識の活用を教育目標にすえていること、認知心理学に基づき活用のレベルを設定し、そのレベルに応じた活用が実際にできるように教育内容を編成していることなどが具体的に明らかとなった。そのため、そのような活用を保証するために、教科書記述がどのようなになっているのか、と同時にどのような構成となっているかを具体的に分析した。

また、その記述や構成は、学校段階に応じて、どのように変化しているのか、その変化にいかなる原理が内在しているのかも吟味した。例えば、活用の具体的場面として、小單元ごとに課題が設定されていること

が多く確認されたが、その課題の種類や問い方にどのような段階的差異が見受けられるか、そこにいかなる原理が内在しているか、を具体的な記述を手がかりに解明しようと試みたということである。

(3) 授業レベルでの分析

分析対象

分析対象としては、現地での学校訪問とここで行った実践者へのインタビュー、および授業実践者向けの教材集が豊富にそろっているホームページより抜粋・再現した授業計画案などである。

現地に赴き、ロンドンとヨークの二つの都市において、同一校区内の初等学校・中等学校を訪問し、そこでどのような歴史の授業がなされているか、また学校間の連携の現状を調査するつもりであったが、ほとんどの学校に訪問を断られ、結局、ヨークの中等学校1校、ロンドンの中等学校1校、ロンドンのミドルスクール1校にしか訪問することがかなわなかった。そのため、現地を訪問した際に見学させてもらえた授業で使用が確認され、インタビューにおいてその幅広い活用がなされていることが確認できた、教材集のホームページ(教師が授業で使用した教材を互いにウェブ上で公開しあい、自由に利用しあうことができるというもの)より、いくつか教材をピックアップし、それを用いた授業計画案を再現し、分析対象として加えた。

分析方法

実際に見学させてもらえた授業については、インタビューによって、授業の意図やそこに内在する教育目標など明らかにすることを行った。また教材集より再現した授業指導案については、その教材を提供した実践者の意図やその教材によってどのような目標の実現が可能かを授業指導案の形式で再現することによって、推測するという方法を行った。どちらにしても、実践者がどのようにカリキュラムの教育目標を消化し、それを日々の実践においてどのように具現化しようとしているのかを解明することにとめた。

4. 研究成果

カリキュラムの分析より、イギリスの歴史教育の特質は、歴史は解釈であるとの前提に立ち、歴史に関する何らかの事実を習得・暗記させるのではなく、特定の研究視点を設定し、その研究視点に基づいて広い視野から考察し、偏見にとらわれることなく、証拠に基づいた自分なりの解釈を歴史において構築できるようにすること、を教育目標の根幹に位置づけていることが判明した。

その教育目標を実現するために、認知心理

学に基づく段階的な思考力育成を可能にする到達目標を設定し、その到達目標を学校段階に応じて段階的・漸進的に深化する研究主題として再構築し、その研究主題にもとづく研究がおこないやすいような単元を選択・配列することによって、具体的に学習プログラムを組織していた。つまり、目標準拠型の教育内容編成をカリキュラムに取り入れて入れていたということである。

こうしたカリキュラムの基本的な構造は初期のカリキュラムから現行に至るまで一貫しており、このような教育が実際に行えるように、出口の部分、つまり大学入試や就職にかかわる評価の部分でも、このカリキュラムにおいて育成がめざされる思考力が実際に備わっているかを評価する問題が企画され、実施されていた。こうした指導と評価の一体化は、わが国の教育を考える上でも、非常に参考になる。

また教科書は、カリキュラムの単元ごとに出版されており(ただしカリキュラムに無い単元向けの教科書も出版されている)、豊富な資料に基づき、いくつかの異なる解釈を併記したり、当時の異なる立場に属する複数の人物の手による資料などを提示したりすることで、歴史を暗記対象としてみなさないという姿勢が徹底されている。と同時に、どのような研究主題が課された単元の教科書であるかを十分に意識し、小単元(教科書の各節)ごとに、必ずいくつかの問題が付与される構成になっている。その問題においては、付属の資料(多くの場合、相反する資料であるため、取捨選択した上での活用の必要がある)を活用し、その単元に与えられた研究主題を意識した問題に答えることが求められていた。つまり、教科書に準拠して学習を行うだけで、到達目標の実現に大きく寄与できる学習となる可能性が高いということである。

さらに、授業のレベルにおいては、各教員へのインタビューより、歴史の授業においてめざされる認識が個別的な知識ではなく、思考力や判断力を伴うものであることが徹底されていることが明らかで、かつ個別の授業においても、そういった姿勢が見受けられた。また公的機関が提供しているコース・オブ・ワークや、NPOが運営する教育実践者向けの教材集のホームページ(ここにはカリキュラムにはない授業向けの教材も提供されている)などでも、提示している資料をどのように子どもたちに活用させればいいのかといった指針が具体的に示されており、教材や具体的な資料が、暗記の対象としてではなく思考の対象として提示されていることがうかがえた。

以上のように、イギリスにおいては、ナショナル・カリキュラムが歴史教育全体の教育

方針を到達目標という形で規定し、その方針としての思考力育成を志向する限りにおいては、個々の授業において扱われる教材や単元は比較的自由、すなわちあくまでも教育における方法的認識のみを最低基準の教育目標として規定したカリキュラムとして、カリキュラムから授業、評価に至るすべての次元において、その実現を志向する教育となっていたとまとめることができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

竹中伸夫「学力としての思考力の段階的育成 - イギリス歴史教育の場合 - 」『日本社会科教育学会全国大会発表論文集』(第4号, pp.278 - 279), 査読なし, 2008年。

[学会発表](計 2 件)

竹中伸夫, 学力としての思考力の段階的育成 - イギリス歴史教育の場合 -, 日本社会科教育学会, 2008年10月12日, 滋賀大学

竹中伸夫, イギリス歴史教育の特質, 社会系教科授業研究会岡山, 2008年6月6日, 岡山大学

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹中 伸夫 (TAKENAKA NOBUO)

就実大学・人文科学部・講師

研究者番号: 60432704